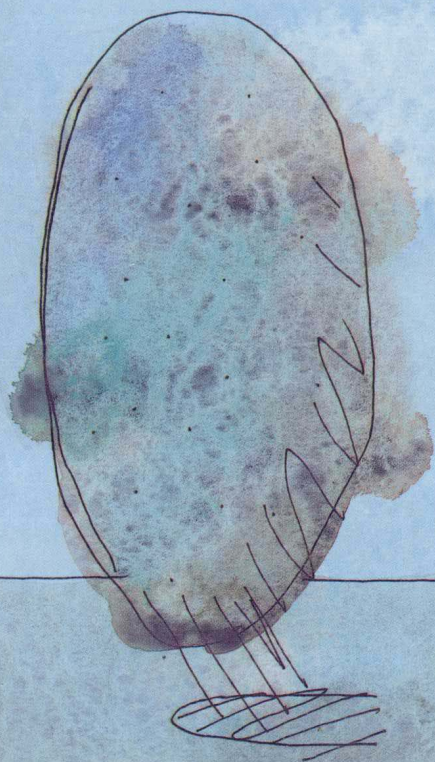


フアディツシュ考現学 '8

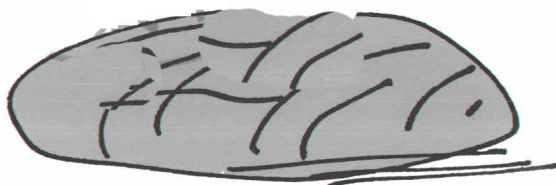
田中康夫



フアデイツシュ考現学'88

田中康夫

1988. 12. 17.



ファディッシュ考現学 '88

1988年6月25日 第1刷 定価900円

★

著 者／田中康夫

発行者／八尋舜右

印刷所／大日本印刷 製本所／清美堂製本

発行所／朝日新聞社 編集・図書編集室 販売・出版販売部

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2 電話・03(545)0131(代表) 振替・東京0-1730

★

©YASUO TANAKA 1988 Printed in Japan ISBN4-02-255716-8

日本人ビジネスマンの精神的労働時間はアメリカのビジネスマンより極めて少ない。⑦

欧米人がパーティーでバリ島芸術に自分の意見を喋れるのは知識ではなく方法論のせい。⑫

テーブルもクロゼット枠も洗面台までも金——ロイヤル・ブルネイ航空のファーストに乗る。⑮

石油とLNGの後はマネーゲームで生きのびる——税金なしの「金・ヒカ」国ブルネイの未来。⑳

堤清二のホテル西洋は「大衆的」アメリカ型ではなく少数の宿泊客主体のヨーロッパ型ホテルだろうか？ ㉔

「いいベッドルームだけどバスルームが狭いわ」ホテル西洋銀座のスウィートで、GFの感想です。㉔

「晴れ舞台」の石垣記者はスケープゴート化？ 弁護士、講談社を過度に信用することなかれ。㉔

自然光の入る「ブードウア」に興奮——ホテル西洋銀座はカジュアルなイクスクルーシヴ感覚。㉔

メルセデスやジャグワーでホテル西洋銀座へ着けた客がまず目にするドア・マン・ブースの怪。㉔

ホテル西洋銀座で白ワインのウェルカム・サービス。でも注文したコルク抜きは「景品」だった。㉔

「良く出来ている」、ホテル西洋銀座のバスルームでうなつたけれど、次の瞬間、思わず「グウェーッ」㉔

「この程度の傷」に「この程度の実況検分」——全治二週間の「傷害事件」をめぐる法廷の睡魔。㉔

「この程度の傷」が、なぜ生じたのか。——基本的認識に欠ける「冤罪思い込み症」の被告を残念に思う。㉔

セキュリテイが売り物なのに深夜のノー・チェック。ホテル哲学を持たない西洋銀座の限界を見た。(75)

「プロの対応」てきない従業員——ホテル西洋銀座の考えるエグゼクチヴとはただのお金持ちのこと？(80)

尋問相手を怒らせる弁護士——「こりゃ、講談社と似たようなメンタリテイだわい」と確信。(85)

それぞれの立場を演じる人たちの思惑が読めた公判を傍聴して感じるのは、証言の恐ろしさだけ。(90)

山本益博の本が税務署を呼ぶ？——体を張って「旨い」「不味い」をはつきりさせた氏の「不幸」(95)

アナキーな街・大阪には、この街ならではのシステムがある。(100)

積極的に流行を先取りする関西のアナキーと関西で受け容れられぬ田中康夫のラジカルとの差。(106)

サラリーマン取締役のいじらしい「愛社精神」答弁、愚かなクライアントを持った弁護士も可哀そうです。(111)

シヤネルの人氣が、すさまじい。パリで香港でブランド物漁りの「大きな声の主」の噂を聞く。(116)

「私たち」トビ職に処女が多いって、ご存知ですか？ フェイスも綺麗なのに恋愛に縁遠い。その訳は……(121)

「別れましょ」と切り出すのはスチュワードの方から。日本人男性がつまらなく見えてくるの(126)

「月」〇〇時間業務と重労働のキャセイが、精神的にとつても楽なわけはね……(131)

「ホテルのハウス・キーピングのオバさんが日航の制服着てたり、モスクワステイはおかしな話ばかり」(136)

「日航つて特別なサービスを求める客にはペコペコする、失敗が怖い優等生集団なんだと思います」

(141)

「最近は大ファッション度の高い男性に『コンパニオンやってます』とは恥ずかしくて言えないの」

(146)

「たけし報道には文化的意義」——『FRIDAY』はウィットに富むアナーキーな集団だと感服。

(151)

「真実はひとつ」との訴えが他人には伝わらぬ、単純突っこめ体質の石垣記者はかわいそうな人。

(156)

『FRIDAY』裁判には魔女狩りの側面もあるが、それにしても雑誌作り、取材活動に隙がありすぎる。

(161)

やらずぶつくりのクリスマス・メニュー——この季節にフレンチレストランに行くのは愚かなことです。

(166)

ARK森ビルに出店を断り田圃の見える岡崎に進出したマハラジャの成功——郊外型ディスコの未来。

(171)

『JJ』がバイブルの女の子にも安心して見る観光名所・マハラジャvs.『流行通信』的ノリのトゥーリア。

(176)

「頑張ったって雇われ店長になれるだけさ」——との常識を引っくりかえしたマハラジャの経営感覚。

(181)

権力のマスコミへの介入強化に冷静な判断を示した『FRIDAY』裁判判決は賢明な選択でした。

(186)

地上げ屋＋空間プロデューサーの「素人」が経営するトゥーリアの事故は、公権力に介入の口実を与えるか？

(191)

朝毎読三紙のJAL完全民営化「提燈特集」——日本航空とは、そんなにも偉大な企業でしょうか。

(195)

日航のおおらかな「退廃」よりはどこかソビエトや中国の官僚、その子弟たちの素行を連想させます。

(200)

「日航つて特別なサービスを求める客にはヘコヘコする、失敗が怖い優等生集団なんだと思います」

(141)

「最近ではファッション度の高い男性に『コンビニオンやってます』とは恥ずかしくて言えないの」

(146)

「たけし報道には文化的意義」——『FRIDAY』はウィットに富むアナーキーな集団だと感服。

(151)

「真実はひとつ」との訴えが他人には伝わらぬ、単純突つこめ体質の石垣記者はかわいそうな人。

(156)

『FRIDAY』裁判には魔女狩りの側面もあるが、それにしても雑誌作り、取材活動に隙がありすぎる。

(161)

やらずぶつたくりのクリスマス・メニュー——この季節にフレンチ・レストランに行くのは愚かなことです。

(166)

ARK森ビルに出店を断り田圃の見える岡崎に進出したマハラジャの成功——郊外型ディスコの未来。

(171)

『JJ』がバイブルの女の子にも安心して見る観光名所・マハラジャ vs. 『流行通信』的ノリのトゥーリア。

(176)

「頑張ったって雇われ店長になれるだけさ」——との常識を引っくりかえしたマハラジャの経営感覚。

(181)

権力のマスコミへの介入強化に冷静な判断を示した『FRIDAY』裁判判決は賢明な選択でした。

(186)

地上げ屋＋空間プロデューサーの「素人」が経営するトゥーリアの事故は、公権力に介入の口実を与える？

(191)

朝毎読三紙のJAL完全民営化「提燈特集」——日本航空とは、そんなに偉大な企業でしょうか。

(195)

日航のおおらかな「退廃」ぶりは、どこかソビエトや中国の官僚、その子弟たちの素行を連想させます。

(200)

**フアディツシュ考現学
'88**

装幀 平塚重雄＋ホットアート

日本人ビジネスマンの精神的労働時間は アメリカのビジネスマンより極めて少ない。

「私は盲目の経験主義者です」

四月六日の夕方、芝公園にある東京アメリカン・センターで、Alexander W. Astin氏は語り始めました。なんだか、僕のようなタイプの人です。が、そのスピーチの内容はアメリカにおける高等教育の改革についてでした。

氏はUCLAの教授であると同時に、その内部にあるthe Higher Education Research Instituteのディレクターでもあります。五〇分余りのスピーチの冒頭で、彼は次のような内容を述べました。

1. High dropout rates
2. Lower test scores
3. Increasing vocationalism
4. Lower faculty salaries
5. More part-time faculty
6. Lower student interest in teaching careers

7. Deteriorating physical plant

8. Declining student economical support

改めて申し上げるまでもなく、大学入学後のドロップアウト率は五〇%前後にまで達し、多くの大学院が入学志願者に課している卒業時学力試験（GRE）の成績も低落傾向にあるアメリカでは、サラリーの低さからくる教授陣の質の低下、時間講師の増加、学生の勉学意欲の低下、施設充実度の低下、奨学金制度の低下といった傾向が現れていると彼は述べるのです。

そうして、自己主義で拝金主義、また物質主義の傾向が強い昨今の学生は収入の多い職業を得るために、コンピュータ、マーケティングといった実践的経営学を志望するようになってきていて、更に、こうした学科では女子学生の増加も目立つというのです。

この、最後に僕が触れたポークーションリズムの問題以外は、日本でも同じ傾向が見られますし、また、それは一応はディプロラブルな現象といえるのでしょう。けれども、就職第一主義（ポークーションリズム）であることを嘆く氏の意見には、もちろん、それに僕は同意するものの、日本においては然（さ）して驚くべき現象でもあるまい。そう思えるのです。

およそ白樺派のノリからは程遠いこの僕にとっては、それは実に不思議な点でもあるのですが、やたらと情念的な文学作品を好む傾向にある多くの日本人は、けれども同時に実学的なるものを尊ぶところ大なのです。

ですから、考えてみれば、明治維新後の日本の大学なんて、東大であろうと慶応であろうと、はたまた反権力ポーズの早稲田であろうと、皆、国威高揚のための法学なり理財なり工学といった実学目的の学校だったのです。

そうして、それが今日の、所謂、名の通った企業への就職率の高い大学がレピュテーションを勝ち得るという状況につながっているのです。日本の大学は、そのオリジンがそもそも、ボケーシヨナリズムに基づくものなのです。

ま、それはともかく、アメリカという、日本とは比べものにならないくらいに実績評価主義の国においては、就職第一主義に基づく教育が、極めて少数の研究型、大学院型のハイクラスの大学を除いては、高等教育レベルでも徹底して行われるべきと考えられているものだとばかり日本では思われているところがあります。けれども彼の話を聞いているうちに、そうした傾向に対する危機意識がアメリカにはちゃんとあることを思い出しました。

一九八四年、国立教育研究所(NIE)によって任命された七人委員会と称する Study Group on the Conditions of Excellence in American Higher Education の報告書「Involvement in Learning: Realizing the Potential of American Higher Education」は、その中でまず第一に大学院以前の高等教育を総称するアンダーグラデュエイト教育のカリキュラムにおけるリベラル・エデュケーション(教養教育)の衰退を批判しています。

一九七一年から八二年の一二年間に、全分野の学士号取得者に占める非職業科目である人文学、社会科学、自然科学の専攻者の比率が四九％から三六％に落ちているように、職業指向が強過ぎたり、どの専攻でも早期専門化が進み過ぎていて、学士課程本来の価値を喪失していると指摘しているのです。

こうした意見は、W. J. Bennett という名の現在の連邦教育省長官が、全米人文学基金(NEH)の理事長を務めていた同じ一九八四年に出した「To Reclaim a Legacy: A Report on the Humanities in Higher Education」にも登場しています。

氏はその中で、アンダーグラデュエイト教育における人文学教育は、本来、人文学、特に西洋文明に関する学習を行うべきであるのに、七五％の大学でヨーロッパ史を、七二％の大学でアメリカ文学や歴史を、八六％の大学でギリシア・ローマ文明を、それぞれ学ばなくとも学士号が取れてしまう状況を、また、人文系の科目を専攻する学生数が一九七〇年と比べて英語で五七％、哲学で四一％、歴史で六二％、近代言語で五〇％の大幅な減少を示していることを報告しているのです。

もちろん、これらの報告書を、僕はとある研究施設の図書館で実際に手に取ってパラパラとめくってみたことはあります。が、丹念に読み通したわけではありません。天城勲氏を代表者とする日米教育協力研究・日本側研究グループによる「アメリカの教育改革」と題されたレポートに、

これら二つの報告書の要旨がコンパクトにまとめられています。ですから、前述の説明もこのレポートに基づくものです。

僕はアスティン氏の話聞きながら、これらの報告書のことを思い出したのと同時に、先日、ダイヤモンド社発行の『BOX』でベルリッツ体験入学をした時に聞いたことを思い出しました。朝九時から夕方六時まで英語のみを使ってのそのレッスンは、昼食時も主任教授と英語でフリー・トークです。最初、日本の若い世代について話していた我々は、日本のビジネスマンはアメリカのビジネスマンより精神的労働時間は極めて少ないという認識で一致したのですが、その際、彼は「今まで何百人もの受講しにやって来た日本のビジネスマンと、こうしてランチを取りながらフリー・トークしたけれども、彼らは自分自身の昇進とゴルフと女性の話しかない。奥行きがまるでない」と言いました。

なるほど、仕事は出来るかもしれないものの、フリー・トークでは大前研一氏と渡辺淳一氏の世界のみしか語れない。こうしたディプロラブルな日本人ビジネスマンが圧倒的に多いのも、日本の教育がポケーシヨナリズムに基づく実学主義だったからなのでしょう。次回は、このあたりから検証を進めます。

欧米人がパーティーでバリ島芸術に自分の意見を喋れるのは知識ではなく方法論のせい。

日本のビジネスマンは、仕事以外の話をしましょうという段になると、前回もお伝えしたように、自分自身の昇進とゴルフと女性の話しかしません。「ギリシア哲学」や「バリ島の芸術」について語ることは、決してないのです。

欧米人は、ご存知のようにパーティーなどの場で、この手の話題を好んで取り上げます。もちろん、それは過去や異文化に対する単なるエキゾチシズムに基づくディレッタントな関心でしかないのかもしれませんが、けれども、どうしても彼らには出来て、我々日本人の多くには出来ないでしょう。

なるほど、能や歌舞伎について欧米人が得々として語るのを聞いていると、我々の方がこうしたジャンルに暗いのもかわらず、あまりに頓珍漢な見解に笑ってしまうことはあります。けれども、少なくとも歴史なり物事なりを見ていく方法論は持っているように思えます。そうして、もうひとつの驚きは、こうした人文学的な話題を、たとえばそれがディレッタントであるにせよ、教育レベルや職業レベル、生活レベルに関係なく、皆、ひとかどに喋ってしまう点です。

UCLA教育学部教授のアレキサンダー・アスティン氏は、講演での後半部分で、五〇%にも及ぶドロップアウト率を低めるためには学生が積極的な参加の出来る教育システムを作り上げなくてはならないとして、その解決策のひとつとして、グループ学習を取り入れるべきだと述べました。

グループ学習を行うことによって、低レベルの学生を引き上げ、また高レベルの学生を更に引き伸ばすことが出来るという氏は、それはUCLAのような幅の広い学生がいる大学でのリベラル・エデュケーション（教養教育）のみならず、医学部のカリキュラムにおいても導入可能であるとして、カナダのマクマスター大学の例を挙げました。

六人で一グループを作り、自分たちが関心を持ったケーススタディをその都度、担当教授を呼んで来てレクチャーしてもらう。これを幾つも繰り返すことで、受け身一方の授業によるよりも治療の仕方をより一層会得していける。また、こうしたベッドサイド・ティーチングの一種を学生側からの能動的な形で行うことにより、たとえ、扱うケーススタディが学生らの望んだものばかりであっても結果的には幅広い知識を修得出来る。アスティン氏は、こう述べました。

氏は、「日本でも既に定評のある」という形容を付けた上で「班」という日本語をも使って説明したのですが、このグループ学習については僕も含めて聴衆の多くから失笑の聲が漏れました。伝統的『朝日ジャーナル』読者ならいざ知らず、多くの方々は日本においてはグループ学習なる

代物が、分数式も出来ない生徒と微積分の出来る生徒を一緒にしての、双方にとって不幸でしかない、単なる教師の自己満足の恵平等教育の一環として根付いたことをご存知でありましょう。

が、氏はそれにもめげずにアメリカ・カレッジ協会（AAC）は一九八五年に発表した「大学カリキュラムの統合性」の中で、探求力・論理的思考力・批判的分析力、読み・書き・話し・聞く能力、数量的データの理解力、歴史意識、科学、価値、芸術、国際的・多元文化的経験、深い学習の九つの領域がアンダーグラデュエイト教育のカリキュラムとして最低必要だと述べているが、それらはグループ学習を取り入れることで解決可能であるとも述べました。

すると、今は成城大学で教鞭をとられている加藤一郎氏が幾つかの質問をされた後、「でも、読み・書きは大学以前の問題ですから、日本では」と発言されました。なるほど、有り余る金にまかせて優秀なる子弟を更に優秀にするべく努力する自営業や芸能界従事者の家庭がその父兄に多い成城大学では、そんなこと常識なのかもしれません。

以前、僕が付き合ったことのある何人かの成城大学の学生も、なるほど、正しく日本語の読み書きが出来る女性ではありませんでした。けれども、前述のように日本人の多くはポケーショナリズムの一環として読み・書きをマスターし、法学・経済等も一応はお勉強をした上で、なのに自分自身の昇進とゴルフと女性の話しかしないビジネスマンとなっていくのです。

そうして、数学などはもちろんのこと、リベラル・アーツに関しても多くの日本人よりも知っ